

いっすんぼうし  
一寸法師

むかしむかし 昔々あるところにおじいさんとおばあさんがいました。年をとって子どもがいなくて、二人は毎日、神様にお祈りをしました。ある日やっど、子どもが生まれました。手の平にのるほど小さい赤ちゃんでしたが、とても元気に泣きました。二人は一寸法師と名づけて大事に育てました。一寸法師はじょうぶなこい子どもになりましたが、せいはおお大きくなりません。「やあい、チビ、チビ」村の子にからかわれるので、一寸法師は考えました。「都へ行って一生けんめい勉強してえらい人になろう。そうすれば皆にばかにされないだろう」。一寸法師はその決心をおじいさんとおばあさんに話しました。二人は一寸法師が旅に出る時に何が欲しいかききました。一寸法師は「おわんとはしと針を一本ください。おわんをふねに、はしをかいに、針をかたなに<sup>たび</sup>して旅をします」と言いました。

いっすんぼうし かわ 一寸法師は川におわんのふねをうかべで、はしのかいでこいで行きました。よる はし した ねむ みやこ お 夜は橋の下におわんをとめて眠りました。都につくとふねを降りました。しばらく歩くと大臣のりっぱな家がありました。一寸法師はどこか大きな家<sup>はたら</sup>で働<sup>べんきょう</sup>きながら勉強<sup>おも</sup>しようと思<sup>だいじん</sup>っていたので、大臣の家へ入<sup>いえ</sup>って行<sup>はい</sup>って、たのみました。一寸法師は体<sup>いっすんぼうし</sup>は小<sup>からだ</sup>さいけれど元<sup>ちい</sup>気<sup>げんき</sup>いっばいですから大臣<sup>だいじん</sup>にき<sup>い</sup>い<sup>いえ</sup>え<sup>だいじん</sup>に入<sup>ひめさま</sup>られ、家<sup>い</sup>においてもら<sup>い</sup>うことになりました。大臣にはきれいなお姫様

ひめさま いっすんぼうし たいへんき い じぶん めしつか  
がいましたが、お姫様も一寸法師が大変気に入って、自分の召使いにしました。

いっすんぼうし じぶん み まわ  
いつも一寸法師を自分のそばにおいて、身の回りのことをさせました。それ

いっすんぼうし ひめさま いえ とき そと い とき いっしょ  
で、一寸法師はお姫様が家にいる時も外に行く時もいつも一緒でした。

ひ ひめさま てら まい い かえ で ひめさま  
ある日、お姫様がお寺にお参りに行った帰りにおにが出てきて、お姫様を

いっすんぼうし はり からだ  
さらおうとしました。一寸法師は針のかたなでおにの体をチクリチクリさし

いっすんぼうし いっすんぼうし  
ました。おにはおこって一寸法師をのみこみました。しかし一寸法師がおに

くち なか はり なが いっすんぼうし くち  
の口の中を針のかたなでさしたので、おにはなみだを流して一寸法師を口か

だ に い ひめさま たいへん  
らはき出しました。そして、逃げて行ったので、お姫様は大変よろこびまし

に あと う で お ほ  
た。おにが逃げた後に「打ち出のこづち」が落ちていました。これをふると欲

で ゆめ じつげん いっすんぼうし  
しいものはなんでも出てくるし、夢が実現するのです。一寸法師はみんなの

おお おお ねが ひめさま う で  
ようにせいが大きくなるようお願いをしました。お姫様が打ち出のこづち

いっすんぼうし わかもの  
をふると、一寸法師はずんずんおおきくなってりっぱな若者になりました。

いっすんぼうし ひめさま よめ  
そして、一寸法師はお姫様をお嫁さんにして、おじいさん、おばあさんの

かえ く  
ところへ帰って、みんなでしあわせに暮らしました。